

保津川河川敷、火入れ後の草地群落の状況

オギ群落

葉に白い筋が一本入ることと、株立せずに、地面から茎が一本一本はえていることから、オギの群落と思われる（平塚市博物館 オギ・ヨシ・ススキの見分け方 2002, https://www.hirahaku.jp/hakubutsukan_archive/seibutsu/tantei/ogkensak.html）。1m 四方を選んで、刈り取りをした結果 $3.40 \pm 0.61 \text{ kg}$ (mean $\pm$ SD, n=5) であった(6月19日、図1, 2)。



図1 火入れ箇所全景



図2 草原内

すでに、火入れしたエリアでは 2m を超えて成長していた。周辺部では、セイタカアワダチソウも見られたが、火入れをしたエリアでは若干の下草はあるものの、ほぼ、オギが優占した植生となっていた。また、オオヨシキリの繁殖場所となっており、オギ群落内で鳴いているオオヨシキリの密度は比較的高いと感じられた（個体数などは未計測）。地面には、冬（2026/2/21）に火入れをしたときの炭化物がまばらに落ちている状態だった（図3）。



図3 刈後の地表面の様子

河川敷の草地資源の活用

「保津川かわまちづくり」と共同してきた「すいたん農園」では、NPO 法人ふるさと保津（理事長：石川清之）がオーガニック農業塾を実施し、雑草を資源として活用する「草マルチ」を使った農法を試験している。去年は、亀岡市から京都府に許可申請を手続きいただ

き、河川敷の草地の利用を試みたが、成熟した草地ではオギが固くなってしまい、刈払機で刈り取るのも困難だった。今回は、新しく成長したオギは鎌で手刈りできる程度の硬さで、草マルチ資源として収穫可能と考えられた。

草マルチを敷設することで、プラスチックマルチよりも生物多様性が増加することが昨年の調査で明らかとなっている（新木ら 2026）。

また、オギについては、研究に乏しいが、同属（ススキ属 *Miscanthus*）のススキでは、共生しているエンドファイト（内生菌）が窒素固定することが知られている。オギについても可能性があり、肥料としての効果が期待される。今回、坪刈で刈り取ったオギは、すいたん農園で草マルチとして利用した（図 4）。



図 4 オギを使った草マルチ

このようなオギや雑草という資源価値が低い、もしくは、刈払わないと問題であると捉えられていた資源を活用することが、Nature Positive な取り組みとして、また、保津川の河川敷のオギ群落を OECM（保護地域以外で生物多様性保全に資する地域）として、位置づけることで、かわまちづくり事業の意義を拡大できるかもしれない。

（環境省 Nature Positive <https://policies.env.go.jp/nature/nature-positive/>,
OECM <https://www.env.go.jp/nature/oecm.html>）

大西信弘
京都先端科学大学 バイオ環境学部